

グローバル化を背景にした保育カリキュラムの現状と課題 —実践と研究との共同構築に向けて—

廿日出 里 美¹

Curriculum framework for children's services in an era of globalization :Striving for collaborative construction of practice and the research

Satomi Hatsukade

はじめに

家庭や就学前教育機関などの子育てのエージェントは、それを取り巻くコミュニティの文化に包摂されたなかで日々の実践を繰り返している(廿日出1998:499-521頁)。筆者はこれまで、文化比較の視角から、日本(1991-1993, 1993-1995, 1998)、アメリカ合衆国(1994-1996)、オーストラリア(2001)、ニュージーランド(2001)の就学前教育機関における実践のフィールドワークに携ってきた¹⁾。最近では、多様な文化の影響を受けながら育つ子どもたちの実態を明らかにすることを目的に、共同研究者たちと日本(2001-2004)と近隣の台湾(2001-2002)、韓国(2002)、中国(2002)、および、南米のブラジル(2004)の就学前教育機関でフィールドワークを実施している²⁾。これらの調査を通して、国内外の文化的な多様性に触れるとともに、それぞれの多文化的状況に密着した(欧米モデルの焼直しではない)保育カリキュラム開発の必要性を感じている。また、同時に、「西洋」対「東洋」という二分法を超えてグローバル化(標準化)されるカリキュラムの類似性と個別の実践のなかでローカル化(土着化)される過程にも注目している。小論では、まず、「多文化的状況の現実にアプローチする保育カリキュラム」、次に、「保育カリキュラムのグローバル化がもたらす問題」の現状を踏まえ、「カリキュラム持続可能性」を鍵概念に保育カリキュラム開発の課題を提示してみたい。

多文化的状況の現実に接近する 保育カリキュラム

グローバル化の流れとは 渋谷はアメリカ合衆国の社会学者のアパデュライ(Appadurai)を引きながら、「グローバル」な形での地球の一体化にともなって生ずる「複雑な流れ」を次のようにまとめている(渋谷 2004:1頁)。

- ①地球規模で移動する人々の流れ
- ②科学技術の流れ
- ③お金や証券など金融の流れ
- ④印刷メディア、映像メディア、最近では電子メールやインターネットなどの電子メディアなど、メディアがつくりだす流れ
- ⑤人権概念、民主主義などのイデオロギーや思想の流れ

日本もその例外ではなく、1990年代に国境を越えたヒトの移動が盛んになる。その後も、出入国者の増加、外国籍住民の急増、国際結婚とそれに伴う出生数が増えたことにより、国内の子どもたちの国籍や文化的背景は、急速に複雑さを増している。そうした多文化的状況は、新たな保育問題を浮上させ、①マイノリティの子どもたちの保育を保障するためのカリキュラム開発、②グローバルに通用する素養や知識を身につけさせるという新しい課題に向けたカリキュラム開発、さらに、③文化的多様性に対応可能な保育者の養成を目的としたカリキュラム開発へと関係者の関心を向かわせることになった。他国に先駆けて、多文化社会の問題に取り組んできたアメリカ合衆国の代表的な保育カリキュラムとして(廿日出2004a:40-48頁)、次の二つを指摘することができる。

1 安田女子短期大学保育科

発達にそくした実践 (Developmentally Appropriate Practice : DAP) / 全米乳幼児教育協会 (NAEYC) 1987 乳幼児の教育実践の意思決定の源となる「発達」理論を厳選して提示する。「発達」理論は、「子どもの発達と学びにかんする12の原理」からなる (廿日出2003a : 140-141頁)。

アンチ・バイアス・カリキュラム (Anti-Bias Curriculum) / 全米乳幼児教育協会 (NAEYC) 1989 教育環境が、性別、文化的、言語的、発達、人種、障害の有無、経験による多様性を反映したものになっているか、そして公正さを求めるものになっているか、保育者養成や現職教育において、大人のもっている偏見を是正する必要性などを、豊富な事例と共に問いかけている (廿日出2003a : 141-142頁)。

保育カリキュラムのグローバル化

マンガやアニメなどの大衆文化だけでなく、就学前教育機関に媒介された保育カリキュラムにおいても、グローカリゼーション (世界化するとともに地方化する現象) が起こっている (廿日出2003a : 147頁)。実際の保育実践のなかでは、拠りどころとする学説によって、ものの見え方、思考のパターン、創出される知が変わる。その結果、発達観・保育観の二極化がこれまで推し進められてきた (表を参照)。

表：保育方法における二律背反の構造

束縛や制限を受けない子どもの能動性を重視する方向性	自発性⇔指導性	指導によって刺激を受け、引き出される能力を重視する方向性
直接的な体験を重視する方向性	体験⇔知識	理論的な思考を重視する方向性
友だちとのかわりなど集団過程の効果を重視する方向性	集団過程⇔個別指導	一人ひとりの発達に合わせた指導を個別に行うことを重視する方向性
体験を中心にした実感をともなった学習をすすめることを重視する方向性	総合的指導⇔系統的指導	やさしいものからむずかしいものへと、もれなく必要な内容を指導することを重視する方向性

[出典：廿日出2003b : 78頁]

保育カリキュラムのグローバル化の例をあげると、1990年代に入って突如として保育界で注目を集めるようになったイタリア北部の小都市レッジョ・エミリアにおける保育実践の伝播がまず、思い起こされる。この実践は、イメージント・カリキュラムと呼ばれ、子どもたちの学びの履歴を「観察と記録」にもとづくドキュ

メンテーションを通して、関係者のみならず、一般の人々に知らしめたところに特徴がある。

レッジョ・エミリア・アプローチ / イタリア レッジョ・エミリア市レッジョ・チルドレン 子どもが集団のなかで知を構成していく能力を理解する。教師の明確な役割を打ち出す。理論は実践から導きとしてではなく、そこに関わるすべての人たちの協力のもとに、生きた教育システムとして機能させる。子どもと子ども時代をどう見るかをみんなで支える教育システムをつくりあげる (廿日出2003a : 142-143頁)。

上述したレッジョ・エミリア市の保育実践は、展示会、印刷メディア、映像メディア、インターネット上のホームページ³⁾を通じて世界に発信されている。

レッジョ・エミリア・アプローチに限らず、古くから、教育の専門家たちは、他国の教育思想や教育制度を自国に紹介する役割を担ってきた。フレーベル、モンテッソリー、シュタイナーなどは言うまでもなく、デューイ、ガードナー、ヴィゴツキー、ブルーナーなど、著名な教育思想家の理論が世界の幼児教育に影響を与えているのは周知のとおりである。しかし、他国で開発されたカリキュラムが原型のまま“移植”されることは稀で、受容 (拒否を含む) の過程では実践レベルの実情に合わせた創出、すなわちローカル化を促進する。たとえば、以下にあげたオセアニアや南米の国におけるカリキュラムもそうした経緯がみてとれる。

テ・ファリキ (Te Whāriki) / ニュージーランド教育省1996 ニュージーランドの国家カリキュラムの原理は、アメリカ合衆国のDAP批判に端を発している。それは、「発達」理論に基づいて、あれこれと保育環境を用意したなかで子どもの成長を見守るよりも、保育実践の意思決定において実質的な鍵を握る、その場の「関係性」や「関わり」を重視したカリキュラムとなっている。先住民のマオリと二文化政策が貫かれている点、並びに、乳幼児教育の実践者による検討期間を経て実施された点でも特徴的なカリキュラムといえる (廿日出2003a : 144-146頁)。

カリキュラムの枠組み (NSW Curriculum Framework for Children's Service) / オーストラリア NSW コミュニティ・サービス省 ニュージーランドのテ・ファリキの枠組みを手がかりにしながら、子どもと就学前教育機関を見る視点を提供する資源として、「カリキュラム」より広範囲を扱う「カリキュラムの枠組み」を提唱している。2001年に16ヶ所の就学前教育機関での試行を経て、修正が加えられるとともに、専門家による評価もなされている⁴⁾。

就学前教育における国家参照カリキュラム (Referencial Curricular Nacional Para a Educação Infantil) / ブラジル教育省 イタリア、スペイン、ポルトガルなどの保育カリキュラムを参考に、国家のカリキュラムが編成されている⁹⁾。

カリキュラムの持続可能性

1980年代後半にアメリカ合衆国内で開発され、多くの議論を呼んだ『発達にそくした実践 (DAP)』や『アンチ・バイアス・カリキュラム』、近年ではイタリアの『レッジョ・エミリア・アプローチ』やニュージーランドの国家カリキュラム『テ・ファリキ』を過剰に批判・評価する研究者が跡を絶たない。カリキュラムの歴史的变化を追い、提示するだけなら、それは「絵に描いた餅」に過ぎない。なかには、実践へ踏み込んで、海外の文献や就学前保育機関の視察等によって触発されたカリキュラムを国内の保育実践で検証しようとする研究者も散見される。だが、それが開発済みのカリキュラムの“消費”に留まるならば、高名なカリキュラムをもって実践しても、長期的に持続するカリキュラムへ発展・定着させるのはむずかしいであろう。実際に、数々の研究プロジェクトで開発されたカリキュラムは、一時的な成果を収めたとしても、その多くが、後に「消え去って」しまうという (コール [天野訳] 1996/2002: 399頁)。それはどうしてなのか。

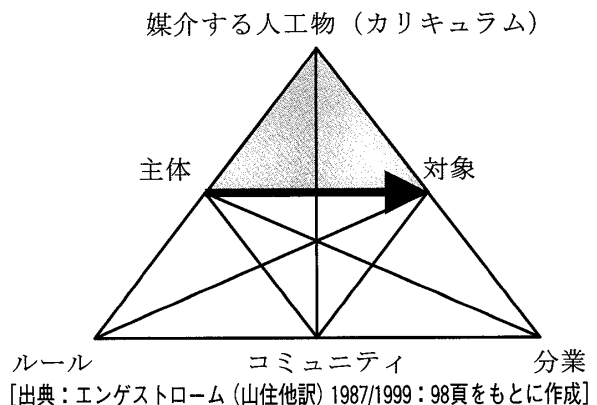
カリキュラムの持続可能性を検討することは、実践とカリキュラムとの関係性を評価するひとつの指標になりそうである。実践のむずかしさは、実践のなかで実践を対象としているところにある。実践は多様で、複雑で、あいまいで、不確定要素が多く、とらえどころがない (廿日出2004b: 123頁)。たとえば、多文化的状況の現実にアプローチする保育実践にカリキュラムはどうかかわっているのか。また、保育カリキュラムのグローバル化は保育実践にどのような波紋を投ずることが予想されるか。

以下、実践とカリキュラムとの関係を持続可能性という観点から考察してみたい。その解明は、研究者がカリキュラムとどう対峙するかという重要な課題に繋がる問題でもある。とりかかりに、筆者が依拠する社会・文化アプローチや構築主義の立場を例にあげるなら、次のような研究的態度を自らに課すであろう。それは、実践の総体とカリキュラムとの関係を、「歴史的な制度・社会とのつながりをもった実践のコミュニティのなかで、いつ、誰が、どのように

読み替え、社会的世界が構築されるか」を通して観ようとする態度である (廿日出2004c: 18-20頁)。そのためには、慎重なデータ収集と分析を必要とする。データ収集と分析の概念的道具として、石黒 (2004) は、エンゲストロームが援用した「活動システム」に着目する。「活動システム」の一般原理は、だいたい次の三点にまとめられる (中原2004: 191頁を参照)。

- ①人間の活動をとらえるには、活動システムが分析の単位として用いられるべきである。
- ②活動システムを構成する要素を、主体、人工物、対象 (目的志向的活動)、ルール、コミュニティ、分業とする。そのシステムと構成要素は歴史的に理解されなければならない。
- ③活動システム内の矛盾、混乱、葛藤は、その活動システムが発展していく源泉として理解されなければならない。

仮に、「主体」を水泳教室に通っている受講生、「対象」を“クロール”で25mを泳ぎきること、それを媒介する「人工物」をカリキュラムとして、図1の構成要素の例を示してみよう。



水泳教室 (「コミュニティ」) には受講生が守らなければならない「ルール」がある。受講生は泳ぎを習い、指導者は泳ぎを教えるなどの「分業」的な役割がある。同じカリキュラムにもとづいた指導でも、「“クロール”で25mを泳ぎきること」を達成する実践は一樣でない。また、「対象」は教室のやりとりのなかで「“平泳ぎ”で25mを泳ぎきること」に途中変更されるかもしれない。このように、一見、焦点化されているように見える「対象」であっても、それは暫定的な姿に過ぎず、そのときどきの交渉によって絶えず更新される可能性がある。

以上のことから、「活動システム」は「対象」そのものを吟味する「枠組み」を提供していることがわかる。もちろん、「活動システム」によって全ての実践の説明がつくわけではない。しかし、「主体」と「対象」を含む活動システムのなかで、保育カリキュラムがどのような関係に巻き込まれているかを記述し、活動システム内の矛盾への適切な処置を探り当てる道具として(石黒 2004:30-31頁), この「枠組み」はカリキュラムの持続可能性(ローカル化過程)を吟味する際、有用な資源となり得る。

ところで、「活動システム」において「対象」が交渉される場とは、いったい何処を指すのであろうか。「活動システム」の「主体」と「コミュニティ」に潜む階層性(図2)は、カリキュラムの持続可能性を阻む大きな要因のひとつとなっていると考えられるので、ここで取り上げておきたい。

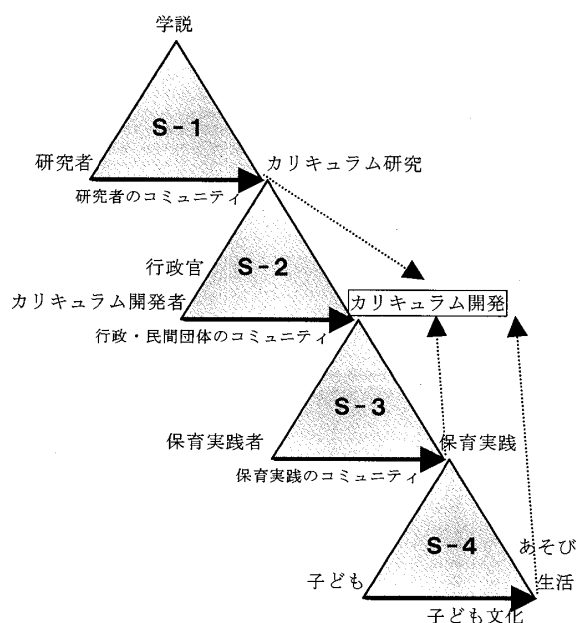


図2：カリキュラムをめぐる活動システムの階層性

保育カリキュラムには、保育者、カリキュラム開発者、および、研究者などの専門家のほか、子ども、保護者、保育学生や地域住民など幅広い層の人々がかかわっている。エンゲストロームの三角形のモデルでは、「主体」は、そのうちの誰でも想定可能なはずである。たとえば、研究者を「主体」とした場合(S-1), その時代の学説を媒介としながらも、研究費や研究条件をめぐる階級闘争的な学会政治、学閥や所属機関の社会的権威で轟く、研究者のコミュニティで「対象」が模索される。また、カリキュラム開発者を「主体」とした場合(S-2), その

活動システムで参照されるカリキュラム研究は、学会とは異なる別の尺度から勘案され、官僚的なコミュニティのなかで「対象」としてのカリキュラムが生成される。さらに、保育者を「主体」とした場合(S-3), 保育実践のコミュニティのなかでカリキュラムは再解釈され、子どもを「主体」とした場合(S-4), 保育実践は子ども(独自の)文化のなかで新たに読み解かれていく。そうした複数の活動システムのすべり構造とシステム間の権力関係をも視野に入れた分析が、カリキュラムの持続可能性の検討に求められる。

おわりに

グローバル化の流れは、主流文化以外のマイノリティ側の多様な声の存在に、人々の関心を向けさせることになった。初学者である保育学生のなかには、かなり定評のある保育カリキュラムであっても、率直に異議を唱える者がいる。子どもの側から大胆な抗議や提案がなされることもある。こうした幅広い層の声にならない声を拾い集め、意思決定のための議論の俎に乗せていくことや、新参者を含めた多様な声を集約し、現状を更新していくことが(図2の「カリキュラム開発」への点線矢印を参照)、実践とカリキュラムとの新鮮な関係を保ち、カリキュラムを実践のなかで生かし続けることになると思われる。そうした相互作用を長期にわたって起こす実践の解明は、実践をどのようにとらえ、理論化していくかという作業と表裏である。また、両者の関係を検討するうえで、試行と評価を含めたカリキュラム開発の構想が必須になってくることは言うまでもない。以上のことから、実践と研究との共同構築をさらに模索していくことが、今後、カリキュラム開発を支えていく重要な鍵のひとつになる、といえそうである。

註

- 1) 日本とアメリカ合衆国における調査の一部は、平成7年度科学研究費補助金奨励研究(A)「入園期のオリエンテーションの日本の特徴」研究代表者 廿日出里美(課題番号:07851036), および、平成5~7年度科学文部省科学研究費補助金国際学術研究「道徳的社会化の態様と教育構造に関する日米比較研究」研究代表者 友田泰正(課題番号:05044020)による。オーストラリ

- アとニュージーランドにおける調査の一部は、平成12～13年度科学研究費補助金奨励研究 (A) 「就学前教育機関と小学校における『クラス』の規範に関する民族誌的研究」研究代表者 廿日出里美 (課題番号: 12710160) による。
- 2) 平成13～15年度科学研究費補助金基盤研究 (B) (1) 「幼児期からの国際理解教育構築への多角的アプローチ—教育学・発達心理学・人類学的観点から—」研究代表者 山田千明 (課題番号: 13410089), 平成16年度科学研究費補助金 (B) (1) 「幼児期からの国際理解教育の実践的展開—教育学・発達心理学・人類学的観点からのカリキュラム開発—」研究代表者 塘利枝子 (課題番号: 16330158), および, 平成14～16年度科学研究費補助金若手研究 (B) 「教育機関のフィールドリサーチにおける倫理綱領の文化比較—実践と研究との共同構築に向けて—」研究代表者 廿日出里美 (課題番号: 14710206), による。
- 3) WEB// www.reggiochildren.it
- 4) 詳しくは、次を参照。
http://www.community.nsw.gov.au/documents/childcare_framework.pdf#xml
- 5) Ministério da Educação e do Desporto, Secretaria de Educação Fundamental 1998 *Referencial Curricular Nacional Para a Educação Infantil*, Volume 1, 2, 3, Brasília.
- 研究成果報告書 (研究代表者 山田千明)
中原淳 2004 「教師の学習共同体をつくりだす」石黒広昭編著 前掲書
廿日出里美 2004a 「全米幼児教育協会の研究動向」『多文化に生きる子どもたち』前掲報告書
廿日出里美 2004b 「子どもの実践知」『多文化に生きる子どもたち』前掲報告書
廿日出里美 2004c 「異文化間接触の文化化構造」『多文化に生きる子どもたち』前掲報告書
廿日出里美 2003a 「おもな国の就学前教育」小田豊・神長美津子編著 『教育課程総論』北大路書房
廿日出里美 2003b 「保育の方法」民秋言・河野利律子編著 『保育原理』北大路書房
廿日出里美 1998 「幼児を対象とした異文化間教育の可能性—解釈学・教育人類学的アプローチ—」江淵一公編著 『トランスカルチュラルリズムの研究』明石書店
- 〔付記〕本稿は広島大学大学院教育学研究科附属幼年教育研究施設創立40周年記念シンポジウムでの発表資料に加筆修正したものである。なお、2004年度北海道大学大学院VAD (Vygotskian Approach to Development) 研究会での議論をもとに「カリキュラムの持続可能性」の部分を追加した。ここに記して、関係の方々にお礼申し上げます。

引用文献

- 石黒広昭編著 2004 『社会文化的アプローチの実際—学習活動の理解と変革のエスノグラフィ—』北大路書房
- エンゲストローム Y [山住勝広他訳] 1999 『拡張による学習』新曜社 [Engeström, Yrjö 1987 *Learning by Expanding: An Activity-theoretical Approach to Developmental Research*, Orienta-Konsultit.]
- コール M [天野清訳] 2002 『文化心理学—発達・認知・活動への文化・歴史的アプローチ—』新曜社 [Cole, Michael 1996 *Cultural Psychology: A Once and Future Discipline*, Harvard University Press.]
- 渋谷恵 2004 「乳幼児をとりまく多文化的状況」『多文化に生きる子どもたち—乳幼児期からの異文化間教育—』平成13～15年度科学研究費補助金基盤研究 (B) (1)